ニコニコ通りの標示作り（中学生と）

二葉幼稚園・つぼみ保育園の実践発表会から公開保育の様子とシンポジウムの中から幼児と中学生との関わりについての話題を抜粋して紹介しています。

発表会全ての内容をご覧になりたい方はこちら

（http://www.sony-ef.or.jp/preschool/jissen/2004/futaba.html）

◇　公開保育の様子

保育室の中では、隣接する荏原第三中学の生徒たちが描いてきてくれたニコニコ通りの標示の絵に一緒に色を付けて完成させていく活動の様子が公開された。

緊張した面持ちで待っていた園児たちも、中学生が姿を見せたとたんに表情がぱっと変わり、いきいきとうれしそうに中学生を迎えていた。「この蝶に色塗ってみようか」という中学生からの声かけに、「見たことないから、色が分かんない！」と園児。すると「じゃあ、図鑑で調べてみようか。」と中学生が園児と一緒にページをめくって確かめている姿が印象的だった。普段から交流を続けている中学生と園児ならではの暖かい関係を見ることができた。

◇　シンポジウムでのコメント

東京学芸大学教育学部幼児教育学科　講師　福元真由美　先生

―「中学生と子どもたちの関わり」が保育者に教えてくれるもの―

今日の 5 歳児のクラスでは、中学生が５，６人保育室に足を踏み入れたとたんに、緊張が解けたような表情をして、彼らの気持ちがほぐれたような印象を持った。子どもたちと中学生との関係がすでにそこにあって、子どもたちが中学生を本当に心待ちにしているという雰囲気を感じることができた。その中で中学生たちが不器用ながらも子どもの気持ちを受け止めて、幼児たちの活動をサポートしていた。なかには、中学生の手の甲にマジックで落書きしている園児もいた。その子に対しても中学生は声をかけながら、一緒に悪戦苦闘して作品を作っていき、一番最後には、他の子に「一番いいのができたじゃん。」といわれるくらい素敵な作品ができていた。中学生の関わりが子どもたちの活動を本当に豊かにしているなと思った。中学生自身が幼い子どもに関わる自分の気持ちに気づいていく、新しい自分というものを見出していく姿というのは、日常の保育の中で大人が子どもと関わる関係の中で感じていることと同じなのではないかと思う。保育者の幼い子と関わろうとすることを支えているもの、共に生きる喜びのようなものにつながるものは何なのか、中学生と幼児との関わりのお話は、そのことを改めて新鮮な思いで気づかせてくれているのではないか、と感じた。

交流をしている中学の校長先生のお話（荏原第三中学校　校長　楚阪博先生）

園児と中学生との関わりから

―中学生は園児と関わることでどんな感化を受けているのか―

１）自分が持っている優しさに気づかせてくれること

２）幼い子の純真さに触れることにより、中学生の心が洗われること

子どもとのふれあいで人を受け入れることができるようになる。子どもたちには悪意がないので、例えば、園児がどろんこの手で触っても、中学生は我慢できている。

３）期待のまなざしで子どもたちが見つめることで、喜んだり自信を持ったりすること

本人たちも無意識で忘れていることだが、期待した目で見られるということが少なくなっている。それが園児との関わりの中で生まれてくる。

４）自己規制する力、優しさが育まれる

教師がたくさん言っても身に付かないことが子どもと触れることで自然と身に付く。

５）子どもの率直な反応に対してとまどいを感じ、他人との関わり方を考えさせてくれること。

率直な反応に対するとまどいが、他人との関わりを自分自身に問い直すきっかけになっている。それは、人間関係の原点であり、中学生は、人と人との付き合い方を幼児から教わっている。

６）自分が役立つことの喜び、存在感、自己有用感が味わえること

自分でも不安に思っている「役立つ」ということを感じられる。

そして、私にとっては、人間としてどう育っていくのか、発達を考えるための原点に立ち戻らせてくれる。子どもたちの見せてくれる姿の何年後の中学生がどうあったらいいのか。何を失ったのだろう。ということを考えて、中学での特設時間を生み出すようにしている。

―感性を育てる面での影響は何か―

「科学する心」というのは、つまり感性ということだと考えている。そして、感性を育てることは、感じる心を育てることと認識している。

以下のような、感じる心を育てる上で大事なことも、中学生は子どもとの関わりの中で学んでいると思う。

・優しさ

・美しさ

・気持ちよさ

・喜怒哀楽の表現

・気持ちを素直に出す（何か変だ、おかしいなど）

子どもの「ありがとう。」などという言葉が中学生にとって、気持ちよさ、またやろうという意欲にもつながる。

そして、「疲れた。でも、かわいいんだよね」という、人間のつきあいの原点のような部分

を感じている。中学生は、子どもたちを見ながら、人間というものはどうあるべきかということを学んでいる。それが、教師がものを言わなくても、子どもたちのところへ行くことにより、分かっていっていることだと思う。これからもこのような関係を大切に続けて行きたいと思っている。